

# タイトル:モラル・ホルダー ～元AV女優の妻と、彼女を観察し続ける夫の記録～

---

## 第一章 過去

私は湯船に浸かる夫の背中を見下ろしていた。洗い場で膝を抱え、湯気に浮かぶ彼の肩のラインを追う。七年間、この背中を洗い、食卓を囁くし、この家に帰る理由を作り続けてきた。

「明日、何か予定ある？」

私の声に、夫の背中がわずかに硬くなった。湯船の縁に肘をかけ、振り返る顔にはいつもの笑みが張り付いていた。

「特にないよ。どうしたの？」

「うん。一緒に出かけられればいいな、って」

言葉は軽く、胸の内は重かった。明日という期限が迫っていたからだ。

湯船から上がった夫は、いつものように私の髪を乾かしてくれた。ドライヤーの音が途中で止まったとき、私は鏡の中の自分と目を合わせた。三十四歳。AV女優として活動していた二十代の面影は、整形もしていないのに完全に消失していた。それが唯一の救いだった。夫に出会った当時、誰も私を「あの」朝海リナだと思わなかった。業界から離れて五年。名前も住所も、すべてを変えて、新しい人間として生まれ変わったつもりだった。

「乾いた？」

「うん。ありがとう」

夫が寝室に向かう背中を見送り、私は浴室に戻った。洗濯機の上に置かれたスマートフォンを手取る。一時間前に届いたメッセージを、もう何度目かで開いた。

【明日、お宅に伺います。奥様のご主人様にも、作品集をお見せできればと思います。】

発信者名は「高橋」。以前の事務所のマネージャーだった男だ。引退後、何度も接触を試みてきたが、私は無視し続けていた。そして先月、ついにブロックした。それが逆上させたのだろう。ネットの海に眠っていた古い映像を掘り起こし、私の現在の住所を特定したらしい。

対応策はなかった。身の危険があるわけではない。ただ、夫に知られるだけだった。それが、どれほどの意味を持つのか、私は知っていた。

翌日は晴天だった。

夫が在宅ワークの合間にコーヒーマシンを淹れているとき、インターホンが鳴った。液晶画面には見知らぬ男の顔が映っていた。私は夫より先に玄関に走り、扉を開けた。廊下に立った男は、七年の歳月を物ともしない、あの頃と変わらぬ顔をしていた。

「朝海さん。久しぶりですね」

「私、そんな名前の人間じゃない」

「そうですか。でも、顔は覚えていますよ？ ファンの間でも、今でも人気があるんです。デビュー作の『処女喪失』、あれは傑作でしたね」

声は意図的に大きかった。リビングの方向へ響く。夫の足音が近づいてくる。私は逃げるように玄関を塞いだ。

「何が目的？」

「単純ですよ。あなたがまた、私たちの元に戻ってくれること。断れば、ご主人に詳しいプロフィールをお届けします。隣人にも、勤め先の皆さんにも」

背後で夫の声がした。

「誰ですか？」

私は振り返れなかった。男はにやりと笑い、名刺を差し出した。夫がそれを受け取る。視線が名刺を横切った瞬間、私は彼の顔色が変わるのを見た。血色が引き、生気が失われていく。まるで内部から腐敗していく果実のように。

「AVプロダクション……？」

夫の声が震えていた。男は丁寧に、残酷に、説明を始めた。朝海リナとしての三年間の活動。出演本数。特に評価の高かった作品のタイトル。映像配信サイトでの現在も続くアクセス数。夫は黙って聞いていた。聞きながら、私を見た。視線は痛かった。疑問と、恐怖と、何よりも——信じたくないという願望が混在していた。

「違いますよね？」

夫は最後に、そう訊ねた。私は沈黙した。沈黙は肯定だった。

男は満足げに帰った。名刺は残した。私たちを残した。

玄関の扉が閉まった後、夫は動かなかった。壁に凭れ、名刺を握りしめ、床を見つめている。私は触れようとした。手を振り払われた。

「……本当？」

「ごめんなさい」

「ごめんなさい、じゃないだろ。七年も隠して……何を隠したんだ？ 体？ 顔？ あんなに、あんなにたくさんの人に……」

声が上ずった。夫は自分の頭を抱えた。呼吸が乱れ、酸欠に陥ったように口を開けた。

「見たくない。見たくない、のに……」

彼はスマートフォンを取り出した。指が震えながら、検索し始めた。阻止しようとしたが、払われた。画面にはあの頃の私が映った。若い、無防備な、知らない人間のように見える自分。夫は動画を再生した。音量は最小だったが、部屋に響く。私の声が。あの頃の演技ではなかった、本当の声。

夫は黙って見ていた。一分、二分。そして突然、画面を消した。伏せた顔を、私は見られなかった。

「本当に……君が、そこに……？」

「今は違う。あれは過去で……」

「俺の知らない君が、そこにいるんだ」

夫は言った。静かに、確信を持って。「俺が触れたことのないところを、何百回も……カメラに向けて……」

その夜、夫は寝室に入らなかった。リビングで朝を待った。私も眠れなかった。朝、台所で顔を合わせたとき、夫は気づいていた。私の隠していた別のスマートフォンの存在に。問いただされ、開示された端末には、未だに届くファンレターの自動転送が設定されていた。数千通の、あの頃の私を求める声。

「まだ、繋がってたんだ」

夫の声は空虚だった。問責ではなく、諦念に近かった。

「消す。全部消すから」

「どうやって？ Netに上がったものは消えない。俺の頭の中からも消えない。駅のホームでさ、あの顔を思い出す。知らない男と、あんなことをしてる君を。それで、電車が来ても動けない」

ふと、夫は笑った。乾いた、壊れた音だった。

「君に触れると、誰かの残り物を触ってる気がする。洗っても洗っても、取れない……」

私は抱きしめた。抵抗されたが、力づくで。夫は震えていた。子供のように、恐怖に怯えていた。私の胸に顔を埋め、鼻をすすり、嗚咽を押し殺した。

「愛してるのに……なんで、吐き気がするんだ」

その言葉が、この物語の核心だった。

その後の日々は、膿の溜まる過程だった。夫は仕事を休むことが増えた。在宅となった。私が出かけるとき、判断のつかない視線を向けてきた。買い物に行くだけでも、何かを疑われている気がした。帰宅すると、家の中を探されていた形跡があった。DVD、古いデータ、私の過去の痕跡を求めて。見つからないと安心し、見つかることを恐れ、同時に求めているような顔をしていた。

ある夜、夫は酔って帰ってきた。初めてだった。椅子に座り、私を見上げた眼には、奇妙な光が宿っていた。

「見たんだ。全部。Endまで」

私は動けなかった。

「何であんな顔するんだ。気持ちよさそうだよ。今の君より、ずっと生き生きしてた。俺とじゃ、あんな風になれないのかな」

「違う。あれは仕事で……」

「仕事って何だよ」

夫は立ち上がった。身長は私より低い。それなのに、圧迫感があった。追い詰められるように、壁際に押されて。

「俺たちのSex、思い出してみろ。君、いつも目逸らしてたろ。何人かと比べてたのか？ 俺のじゃ満足できなかったのか？」

「そんなこと……」

「嘘つくな」

夫の声が、初めて怒気を帯びた。そしてすぐに、涙声になった。

「見せてよ。その目で。君が満足してる顔、もう一度見せてよ。あのVideoみたいに」

私は服を脱いだ。使われた過去で、今の彼を救いたかった。肌を晒し、夫に抱かれる。しかし彼の指は、どこか躊躇し、確かめながら滑った。これが誰の形か、というように。

「目を見てくれ」

私は見つめた。夫はすぐに逸らした。

「駄目だ。思い出す。お前の中で誰かが笑ってる……」

夫は退いた。布団に潜り、耳を塞いだ。私は裸のまま、明かりの下に突き立てられた。

こうして、追い詰められていくのは夫の方だったのに、狭い部屋に閉じ込められたのは私の方だった。過去という檻に、私たちは共に入れられていた。

三ヶ月後、夫は精神科を受診した。PTSDの症状と診断された。原因は「妻の過去による精神的ショック」と、カルテに記されるのを私は見た。待合室で、夫は無関心そうに雑誌をめくっていた。向かいの椅子に座る患者が、ふと顔を上げた。中年の男性だった。彼の視線が私を捉え、見覚えを探るように細められた。

「あ、あなたは……」

私は立ち上がった。夫は無反応だった。呆けたように、虚空を見つめていた。インターホンの音がまだ耳に残っている。七年間築いた砂の城が、もう一度水に溶けていく音が。

夫は何も聞いていなかった。聞こえないふりをしていたのか、本当に聞こえなかったのか。私にはわからなかった。わからないまま、私は彼の手を取った。冷たかった。握り返すことはなかった。ただ、精一杯、小さく、虚空に向かって、彼は頷いていた。何に対してもわからないまま、永遠に、頷き続けていた。

---

## 第二章 取引

私たちは歩き始めた。病院の廊下を、白い光に照らされた迷宮を。夫は自動的に足を踏み出す。私が導く方角へ、抵抗もせず、質問もせず。まるで水の中を歩くような、無抵抗な従順さ。

「車、呼ぼうか？」

「……歩く」

初めて喉を震わせた言葉だった。私は驚いて顔を上げた。夫は正面の扉を見つめ、虚ろな眼のまま、再び口を開いた。

「人の視線が、怖いんだ」

言葉の意味を咀嚼する間もなく、外に出ていた。昼下がりの街は、のんきに騒いでいる。通りかかった会社員の集団が、笑い声を上げた。夫はその音に、全身を硬くした。私が腕を取ると、ぴくりと跳ねた。

「触らないで」

小さく、鋭く。私は手を引っ込めた。歩道の端に、夫は膝をついた。嘔吐もせず、ただ息を荒げている。救急車を呼ぼうとしたとき、彼は首を振った。震える手で、ポケットから錠剤のケースを取り出した。朝、処方されたものだ。白い錠剤を舌の上に乗せ、水も飲まずに咽た。

「……少し、楽になった」

嘘だった。顔色は青ざめたまま、額の汗は増えていた。それでも立ち上がる。家の方角へ、ふらふらと歩き出す。私は三歩後ろをついていった。肩に触れようとする、また跳ねられる。安全距離を保ちながら、帰路についた。

家に着くと、夫は寝室に閉じこもった。ドアに鍵はかけられなかった。かけられないのだ。震える指では、細かい作業ができないらしい。私はリビングに座り、時計の針を眺めた。高橋の名刺が、テーブルの上で、殺虫灯に集まる虫のように、当たり障りのない場所に置かれている。

二度と来ないでほしかった。二度と連絡しないでほしかった。そう願いながら、私は名刺を手にとった。裏に、鉛筆で何か書き加えられていることに気づいた。

【今夜、緊急で打ち合わせがあります。23時、公園に。】

文字は乱雑で、興奮を示していた。私は名刺を握りしめた。ゴミ箱へ放り投げようとして、やめた。23時。夫は睡眠剤で眠っているだろう。決断は速かった。行かなければ、明日、もっと悪いものが届くだろう。住所まで知られているのだから。

夜が更えた。夫の寝息が規則正しくなったのを確認し、私はコートを羽織った。玄関を開ける音は、病み上がりの耳には届かない。外に出た。4月の夜風は、いまだに冬の名残を含んでいた。公園は駅から歩いて十分。子供の頃から変わらぬ、古い遊具と砂場。高橋はブランコに座っていた。一人だった。

「来たね。賢明な判断だ」

「何が目的？ お金？ あなたに何ができるの？」

「厳しいなあ」

高橋は立ち上がった。七年の間に、太った体躯を持て余すように、動きは鈍っていた。私は後ずさりした。影に、もう一人の気配があった。

「誰？」

「紹介しよう。大山プロデューサー。君のデビュー作を作った人だ。忘れたか？」

暗闇から現れた男は、確かに記憶にあった。五十代半ば、白髪交じりの髪を後ろで束ね、あの頃と変わらぬ笑みを浮かべていた。私の身体は、生理的にがたついた。彼のの前では、私は常に二十六歳の新人で、脅され、流され、契約書にサインをさせられた。

「朝海リナ。懐かしいね。あの時の君は、本当に美しかった。今も美しいよ。ただ、少し、大人びすぎたかな」

大山は近づいてきた。逃げ道はなかった。背後には高橋が立ち塞がる。

「君の旦那さん、可哀想だね」と大山は言った。「俺たちの傑作を見て、壊れちゃったんだって？ それは仕方ない。君は天性のものを持っていた。カメラを向けられた瞬間、別人になる。芯から蕩ける顔。あれは、演技じゃない。本能だ」

「黙って」

「否定しないね。つまり、認めてるわけだ。あの頃の君は、本気で感じてた。仕事じゃなくて、楽しんでた」

言葉が胸を抉る。否定できない。あの頃の私は、確かに、何かに解放されていた。カメラの前でのみ、私は許された存在だった。それを否定することは、今の私自身を否定することになる。

「で、何が目的？」

繰り返した質問に、大山は懷から封筒を取り出した。中身をちらりと見せた。写真だった。病院の前で、夫が膝をついているところ。救急車を呼ぼうとしている私。あの瞬間の、私たちの脆さが、鮮明に焼き付けられている。

「取引だよ。一本だけ、出演してくれ。リユニオン作品。朝海リナの復活。ファンは狂喜する。絶対的大ヒット。撮影は一日、終われば、全ての素材を返す。君の旦那さんにも、隣近所にも、何も漏らさない」

「断る」

「断れば、明朝、これが掲示板に流れる。病院に通ってる幸せそうなご夫婦。可哀想な話だよね。誰かが傷口を舐めたくなるだろうね」

封筒は、私の手の中に押し付けられた。重かった。中身の写真の重さじゃない。決断の重さだった。

「考える時間をやろう。明日の夜、同じ時間。返事を聞かせよう」

二人は闇の中に消えた。私は公園のベンチに座り、震える膝を抱えた。帰る。帰らなければ。でも、どこへ？ どの顔で、夫の前に立てばいい？

家に着いたのは、夜明け前だった。寝室を覗くと、夫は起きていた。ベッドに腰掛け、窓の方角を見ていた。振り向かない。

「どこに、行ってたの？」

声は平坦だった。怒りも、悲しみも、何も感じさせない。それが、一番、恐ろしかった。

「……散歩」

「そう」

会話は終わった。夫は再び横になり、布団を被った。私はその輪郭を見つめ、選択肢を考えた。二つしかなかった。過去に屈服するか、現在を破壊するか。

昼下がりになって、夫は初めて口を開いた。食卓で、私が味噌汁を運んだときだ。

「見たんだ」

「何を？」

「君の、レビュー」

箸が落ちた。夫は携帯電話の画面を、私の目の前に突き出した。古いAVレビューサイト。私の作品に対する、客の妄想的なコメントが、何百と並んでいる。

「『自分の女がこんな顔したら発狂する』……『この顔、絶対本気』……みんな、君の本音を見てたんだね。俺だけが、知らなかった」

「もう見ないで。お願い」

「見たくないよ。でも、見ちゃう。頭の中に、君がいて。誰かと、あの顔してる君が」

夫は画面を消した。そして、初めて私の方を見た。目が潤んでいた。怒りで、悲しみで、それとも――。

「もう一度、見せてよ」

「……え？」

「あの顔。ここで。俺に。そしたら、俺も、あのお前を知ってる男と、同じ気持ちになれるんじゃないか」

私は、理解できなかった。懇願していたのか、宣告をしていたのか。夫は立ち上がり、居間のテレビにDVDプレーヤーを接続した。そこに、一枚のディスクを入れた。ケースはなかった。私の、代表作だった。

「今日は、見ない。君が、演じて」

画面は暗いままだ。照明を消した。カーテンを閉めた。部屋は、カメラの前よりも、私を暴き出す照明になった。夫はソファに座り、待った。

「お願いだ」

私は服を脱ぎ始めた。七年ぶりに、あの時の手順を思い出した。布団を敷き、照明の角度を調整する。しかし、夫は止めた。

「違う。あの時みたいに、見せて」

Recordedでなく、Liveで。私は動いた。心を、どこか遠くへ、あの頃のように飛ばしながら。夫の目の前で、自分を解き放った。どこかで、あの頃の声が出てしまった。作られたものではなく、響くもの。

夫は見ていた。最初は冷静に、次第に呼吸を乱し、最後には泣いていた。終わったとき、私は無防備に横たわっていた。夫が近づいてきた。肌に触れる。今度は、跳ねられなかった。



「……君が、ここにいる」

そう呟いて、夫は私を抱きしめた。強く、骨が軋むほどに。白い天井を見上げながら、私は理解した。この行為が、私たちに何をもたらすのか。

夫は、越えたのだ。否認から、所有へ。私の過去を、今の彼のものとして取り込んだ。それは、救いなのか、それとも別の檻なのか。

夜になった。夫は、初めて眠りについてくれた。安らかな寝息だった。私は、balconyに出て、携帯電話を開いた。高橋にメッセージを打った。

【受けます。条件は変えないで】

返事は即座に来た。

【待ってたよ。詳細を送る】

私は夜空を見上げた。星はなかった。夫の寝息が、背後から響く。二本の道が、私の前にあった。しかし、もう引き返せないことを、私は知っていた。カメラの前で、私は再び朝海リナになる。そして、その夜、夫の前で、妻になる。二つの顔の間で、私は吊るされる。

明日、撮影は始まる。夫は知らない。知らないまま、私は出かける。その先に、何があるのか、私にも予想できなかった。ただ一つ確かなのは、どちらを選んでも、私たちはもう、元の私たちには戻れないということだけだった。

風が吹いた。春の終わりを告げる、冷たい風だった。

---

## 第三章 復活

撮影当日は雨だった。

続く